

目次

はじめに	Ⅰ	日本人項目一覧	302
本書の使い方	Ⅲ	アメリカ人項目一覧	304
日本人編	Ⅰ	身ぶりと異文化理解	306
アメリカ人編	151	増補新装版へのあとがき	320

日本人編

J-1. 両腕交差	2	J-5. 後ろ手	10	J-9. 額を掻く	18	J-13. ふくれっ面	26
							
J-2. 腕組み(+怒った顔)	4	J-6. 背を向ける	12	J-10. 冷や汗を拭く	20	J-14. 片手を頬に当てる	28
							
J-3. 腕組み(+深刻な顔)	6	J-7. 額に手をやる	14	J-11. 頬づえ(+憂鬱顔)	22	J-15. 胸に手を当てる	30
							
J-4. 時計を見る	8	J-8. 額を叩く	16	J-12. 頬づえ(+笑顔)	24	J-16. 胸の前で手を合わせる (+笑顔)	32
							

はじめに

人のしぐさや顔の表情は魅力的です。ことばがなくてもその人の気持ちや感情を伝えますし、ことばとともに使われれば、そのことばの解釈により深い洞察を加えることもできるようになります。このように、コミュニケーションの中で大切な役割を果たしている身ぶり・しぐさ・顔の表情を辞典として一冊にまとめたのが本書です。英語話者のジェスチャーについては何冊か類書が出ていますが、日本人の身ぶりについてこれだけの詳細な調査結果をまとめたものは、おそらく本書がはじめてでしょう。海外からのビジネスマンや留学生にも関心を持っていただけたらと願っています。

筆者は日本人のコミュニケーションを、共同研究者の Laura Ford はアメリカ人のコミュニケーションを多くの人に理解してほしいと願い、お互いの文化のしぐさや表情・行動様式の共通点や相違点を明らかにしようと、1982年から研究プロジェクト「身振りの日米比較対照研究——『身振りの辞書』作成を目的して」を開始しました。そして、日米の映画やテレビドラマを使って、お互いの文化で日常よく使われる身ぶりを一つ一つ拾い上げ、その意味を探るところから研究を始めました。

私たちは個々の身ぶりについて、日米それぞれの文化の母語話者としてさまざまな観点からディスカッションを重ねました。そうする中で、意味だけでなく、男女の性別、年配・若者・子供といった年齢、相手と親しい間柄かどうか、目上か目下かといった上下関係や形式度、上品か下品かという品位、ことばと一緒に使われるかどうかなどの「使われ方」に暗黙のルールがあることに大変興味を持ちました。そして、この調査から得られた「使われ方」についての記述は、本書の大きな特徴となっています。

ディスカッションの結果を基礎データとした上で、日本人については、漫画のイラストを用いてアンケートを作成し、学生や社会人100名に協力してもらい、その結果を客観的なデータとして考察に加えました。また、アメリカ人については、South Carolinaで30名の地域の人々に、基礎データとした映画の場面をビデオで見てもらって意見を聞き、分析に加えました。さらに、日本人の身ぶりが英米の人々にどのように理解されるかについては、日本にいる英米人8名に詳細

な記述式のアンケートを依頼し、協力してもらいました。このように客観的データを加えた上で考察を重ねてはいますが、それでも、本書の「日本人の」「アメリカ人の」は、この調査に協力してくれた人々と私たちの意見という限定つきであることとお断りしておきます。

本書は、身ぶり・しぐさ・顔の表情についての一つの記録です。若者語に流行があるように若者の行動様式も常に変化していますし、しぐさの男女差が減りつつある傾向も日米ともに見られます。また、国際的にも人の交流が増え、さまざまな国のニュースやスポーツ番組、映画などの映像が手軽に見られるようになり、文化ごとの違いにも変化が顕れてきています。したがって同様の研究を継続し、そのときどきの変化を記録していくことが重要でしょう。

<異文化スケッチ>というコラムでは、筆者のヨーロッパでの体験談を描いてみました。ヨーロッパはまたそれぞれの国や地域で独特なしぐさがありますし、イギリスとアメリカも同じ英語圏でありながらさまざまな違いがあります。ヨーロッパを中心にした身ぶりについては、著名な動物行動学者である D. モリスの著書『ボディートーク 世界の身ぶり辞典』があります。本書で取り上げたしぐさに関連したものは、巻末の項目一覧に一表として挙げましたので、参照されると奥深いしぐさの世界にさらに興味を持たれることでしょう。アジア文化圏についてのしぐさの研究は、まだ開始したばかりであり、今後成果をまとめることができると考えています。

本書ができあがるまでに、多数の人々の協力がありました。研究段階では、トヨタ財団から研究助成金と出版助成金を、明海大学から特別研究費を得ることができました。アンケートの集計やイラストの下絵作成には明海大学の卒業生が協力してくれました。また、本書をまとめる最後の段階に在外研究でヨーク大学に滞在したことは非常に有益でした。編集・校正の段階では株式会社ジャレックスの村上眞美子さんにお世話になりました。そして最後に、長期にわたった研究の間、僅かずつしか仕上がらなかった原稿を辛抱強く待ち続け、励ましてくださった三省堂編集部の柳百合さんに心からお礼申し上げます。

2003年6月1日 ヨークにて

東山 安子

本書の使い方

本書は、日本人の動作74項目とアメリカ人の動作69項目からなる。

日本人編、アメリカ人編ともに、各々の動作は次のように分類し、分類項目の英語のアルファベット順に配列した：

ARM (腕), BACK (背), BROW (額), CHEEK (頬), CHEST (胸), CHIN (顎),
EAR (耳), EYE (目), FINGER (指), HAND (手), HEAD (頭), HIP (腰),
LEG (脚), MOUTH (口), TEETH (歯), NOSE (鼻), SHOULDER (肩),
TONGUE (舌), TEMPLE (こめかみ)

日米ともに、それぞれの文化の母語話者である東山（東京都出身）とFord（North Carolina出身）が映画およびテレビドラマの映像を用いてディスカッションを重ねた基礎データをもとに、以下に説明する調査データを加えてまとめた。

【日本人編】

共同研究における基礎データをもとに、日本人の学生と社会人の男女100名を対象に実施したアンケート結果を中心にまとめた（アンケートの作成・実施・集計・分析は東山が担当）。

action 動作

身体の動きや顔の表情の説明である。イラストは、アンケートに用いた漫画ではなく、本書のために書き下ろしたものを使用した。

meaning 意味

動作の意味である。アンケート回答の多様な表現やニュアンスの違いをできるだけ吸い上げて記述した。＜意味＞が複数ある場合には、番号をつけて示した。どういときに用いるかという＜状況＞の説明は*で示した。＜動作と一緒に使われることば＞がある場合には、その例も挙げた。

usage 使われ方

アンケートの調査結果を、1) データを記号化して示した表、2) 調査結果のパーセンテージ、3) データの解説、の3つに分けて解説した。表の記号は、調査結果のパーセンテージをもとに分かりやすくまとめたものである。記号の読み方は、以下の通りである：

【使用頻度】アンケートの「見たことがあるか」という質問に対する回答をもとに、

以下のように示した。

◎ = 「よく見る」が30%以上, ○ = 「よく見る」 + 「時々見る」が80%以上,
△ = 「見たことがない」が20%以上

【性別】 F = 女性が使う, M = 男性が使う, MF = 男女とも使う, M > F = 男女とも使う
が男性の方が多く使う

【年齢】 A = 大人が使う, C = 子供が使う, AC = 大人も子供も使う
(大人の中でも, 年配が使うか若者が使うかは, 特に示してない)

【親密度】 H = 親しい間柄の人に対して使う, L = 初対面や見知らぬ人を含め, 誰にでも使う, H > L = 親しい人に対して使うことの方が多い, — = 特に相手との親密度に関係なく使う

【形式度】 H = 堅苦しいフォーマルな状況で使う動作で, 目上の人に使う動作, L = リラックスした状況で使う動作, N = 特にどちらでもない普通の状況で使う動作

【品位】 H = 上品な動作, L = 品のない下品な動作, N = 普通

comparison 比較 (英米人の意見より)

日本に滞在しているアメリカ人5名, イギリス人3名に, 詳細な記述式アンケートを依頼し, その回答の一部をまとめた。

✌ **plus alpha** 🖐

動作についての関連説明をしたコラムである。

【アメリカ人編】

「卒業(The Graduate, 1967)」「アメリカン・グラフィティ(American Graffiti, 1973)」「ジョーイ(Something for Joey, 1977)」「イエスタデイ(Yesterday, 1979)」の4本の映画から拾い出した動作に関する共同研究の基礎データをもとに, South Carolinaにて地元のアメリカ人30名に対しビデオ映像を用いたインタビューを行い, 基礎データを再検討し, 修正した (アメリカでのインタビューはFordが担当)。

action 動作

身体の動きや顔の表情についての説明である。

meaning 意味

映画から拾い出した動作場面を記述してデータカード化し、それを分類して意味を特定した。データに出てこなかった意味については、Fordが付け加え、インタビューで確認した。意味が複数ある場合には番号をつけて示した。*は状況などの補足説明、□は用例で、映画からの用例には出典を示した。

usage 使われ方

基礎データとインタビューの分析結果を記号化して示した表とその説明からなる。表の記号の読み方は、以下の通りである：

[使用頻度] ◎=日常生活でよく使う動作，○=日常使う動作，△=時々使う動作

[性別] M=男性が使う動作，F=女性が使う動作，MF=男女とも使う動作。M>F=男女とも使うが，男性の方がより多く使う動作

[年齢] A=大人が使う，C=子供が使う，AC=大人も子供も使う

[親密度] H=親しい間柄の人に対して使う，L=初対面や見知らぬ人に使う，—=特に相手との親密度に関係しない

[上下関係] アメリカ人にも上下関係による使用ルールは存在する。日本人の場合は、フォーマルで堅苦しい動作は目上の人に対する礼儀正しい動作でもあり、リラックスした動作は目上の人の前ではすべきでないといわれるが、アメリカ人の場合は、リラックスした動作であっても目上の人にしてよい場合もあるため、項目の示し方を「上下関係」のみに絞った。たとえば、L→H×=目下の人が目上にすべきではない動作，H→L=目上の人が目下の人にする動作

[品位] 日本人の場合にHで示したような上品なしぐさというのは特にはない。
N=普通，C=リラックスした動作，L=下品な動作

[ことばとの関係] アンケートでは設問がなかったため、日本人編には入れていない項目である。G=動作だけで用いる，G+S=ことばとともに用いる，G+S>G=動作だけで用いる場合もあるが，ことばとともに用いることの方が多い

comparison 日本人との比較

日本人も同様に使うかどうかについて、日本人編の関連動作を示しながら解説した。

✎ 異文化スケッチ ✎

在外研究で滞在したイギリスのヨークを中心に、ヨーロッパにおける東山の体験談をまとめた。親指上げや指文字などのジェスチャーに関するもの、出会いや別れの挨拶、イギリス人のよく行列をつくる行動様式や、ヨーク大学の学生たちの生活様式などを取り上げた。ヨーロッパとアメリカではもちろん共通点も多いが違いも多い。ヨーロッパを中心とした身ぶりについては、D.モリスの著書の関連動作を項目一覧で紹介したので是非参照されたい。

【項目一覧】

日本人編とアメリカ人編の関連項目を一表で示した。また、D.モリス著の『ボディートークー世界の身ぶり辞典』（三省堂、1999）の関連動作項目を<BT-No.>の形で示した。

本書を完成するまでに長い研究期間があったが、その間に論文として成果を発表してきたものの一部を下記する。さらに詳しい研究成果や研究方法に関心のある読者は是非参照されたい。

東山安子・L.フォード(1982)：「身振りの日米比較：身振りの辞書・日本人の動作編」『言語の社会性と習得』（秋山高二・山口常夫・F.C.パン編、文化評論出版社）

— (1982)：「日米のあいさつ行動の記号学的分析」『記号学研究No.2』（日本記号学会編、北斗出版）

— (1983)：「日米の文化的視点からみた身振りの一分類法」『記号学研究No.3』（日本記号学会編、北斗出版）

— (1984)：「身振りの調査に関する方法論的考察」『記号学研究No.4』（日本記号学会編、北斗出版）

東山安子(1984)：「Gesture」『カラーアンカー英語大辞典』（学習研究社；「I・SEE・ALLカラー図解英語百科辞典」と改訂、1991）

— (1987)：「身振りの普遍的機能と文化的機能」『社会・人間とことば』（F.C.パン他編、文化評論出版社）

— (1991)：「非言語記号—Emblemの文化比較考」『明海大学外国語学部論集第3集』

— (1992)：「日本人の行動様式と日本文化」『文化言語学—その提言と建設』（文化言語学編集委員会編、三省堂）

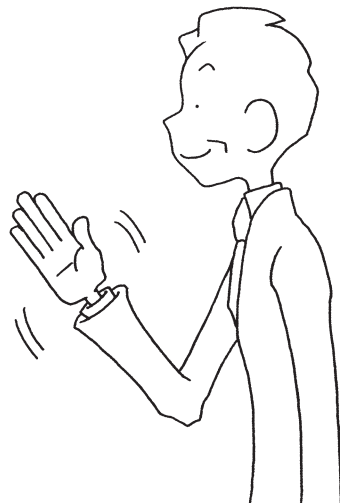
— (1999)：「身振りの辞書の試み—その現状分析と日本人の身振りの使用法に関する調査報告」『明海大学外国語学部論集 第11集』

— (2001)：「欧米とアジア圏の人々からみた日本人の対人姿勢とコミュニケーション」『明海大学外国語学部論集 第13集』

J-46. 手刀

action 動作

片方の手のひらを立て、軽く1回、あるいは数回上下に動かす。軽く頭を下げる動作を伴うことも多い。



meaning 意味

- ①感謝の気持ち。
*お茶を出されて、いただくとき。
「すまないね」
- ②謙虚な気持ち、恐縮している。
*人から物をもらったとき。
- ③簡単なお礼。
*ちょっとしたことへのお礼の気持ちを表すとき。
*頼んでいた物を友人が持ってきてくれたときなど。
「悪いね」
- ④人の前を通るとき。
「ちょっと、失礼！」「通してください」

usage 使われ方

使用頻度	性別	年齢	親密度	形式度	品位
○	M>MF	A	H>L	N>L	N

M:MALE F:FEMALE A:ADULT C:CHILD H:HIGH L:LOW N:NORMAL

- 使用頻度** 自分が使うか……よく使う14% 時々使う33% 使わない53%
見たことがあるか……よく見る23% 時々見る63% ない14%
- 性別** 男性がよく使う62% 男女とも使う32% 女性がよく使う6%
- 年齢** 大人が使う92% (年配49% 若者3% 両方40%)
子供が使う0%
大人も子供も使う8%
- 親密度** 親しい間柄の人に用いる52% 誰にでも使える48%
- 形式度** 形式的な堅苦しいしぐさ20% 普通42% リラックスしたしぐさ38%
- 品位** 上品なしぐさ9% 普通79% 下品なしぐさ12%

- 自分が「よく使う」と「時々使う」は5割弱ですが、他の人がする
- のを「よく見る」と「時々見る」は86%を占めています。大人の
- 男性、特に年配の人ががよく使うしぐさです。形式度は「普通」か
- ら「低め」で、品位は「普通」です。

comparison 比較(英米人の意見より)

片手を立てるのは不自然で、このようなしぐさは使わないとの回答です。感謝を表すときは、以下のようにします。

- ・頭を少し下げて "Thank you." と言う。
- ・"Thank you." と言いながら、女性は相手の手を取り、男性は握手をする。

✌ plus alpha 📎

「手刀」とは、手指をまっすぐにそろえて伸ばし、小指側の側面を刀のように使うことです。相撲で「手刀を切る」というのは、勝ち力士が懸賞を受け取る時の作法で、右手を手刀にして中・右・左の順に切ります。



A-12. ROLLING EYES 眼球回し

action 動作

目を大きく開け、眼球をぐるりと回す。

meaning 意味

①あきれた、軽蔑する。

*誰かがあきれしてしまうようなことをしたときに、その人に対して使う。それほど深刻ではなく、たわいもないことに対して使う。

□朝食のために買っておいたジュースを、夫がそうとは知らずに全部飲んでしまったのに気づき、妻が「あらまあ」と眼球を回す。

□パーティーに遅れて来た彼女に対し、相手の青年が怒った顔をする。彼女は座り直しながら、少し遅れたくらいで怒ったりしてと言わんばかりに、両目をくるっと回す。

— Yesterday —

□マットのアパートに彼の祖父のパートが来る。風呂場にかかっていた女物のストッキングを見つけ、ストッキングに片手をかけながら、首を少し右に傾けて、両目を左から真上、そして右へとぐるっと回す。

— Yesterday —

②「やれやれ」「ああ、よかった」

□授業中に先生がみんなの宿題を調べて回っている。宿題をやっていなかったので困ったなあと思っていたら、自分の所に来る前に終業のチャイムが鳴ったので、「ああ助かった」と眼球を回す。



□野球チームをやめたいと、父親に言ってきたジョーイだが、やっぱりやめないう気持ちになった。「ジョーイは少しは分かってくれたようだ。やれやれ、一騒動終わって」という気持ちで眼球を回す父親に、母親がほほえみかける。

— Something for Joey —

usage 使われ方

使用頻度	性別	年齢	親密度	上下関係	品位	ことばとの関係
○	F>M	AC	H	L→H×	C	G/G+S

M:MALE F:FEMALE A:ADULT C:CHILD H:HIGH L:LOW N:NORMAL
C:CASUAL G:GESTURE S:SPEECH

- 使用頻度は「普通」。男女ともに使いますが、女性のほうが多く用
- いる傾向にあります。大人も子供も使います。子供は兄弟同士など
- で、かなり大げさにこの動作を使うことがあります。親しい間柄で
- 使う動作で、社会的地位の高い人に対しては使いません。"Good
- grief! (これは大変!)" (意味①)や"Whew! (やれやれ)" (意味
- ②)などのことばといっしょに目を動かすこともあります。

comparison 日本人との比較

日本人は、眼球をぐるりと回すような表情はしません。意味②のような、「ああ、よかった」というときには、片手や両手を胸に当てる等の動作をします(cf.J-15)。



EYE

増補新装版へのあとがき

2003年に刊行した『日米ボディーク 身ぶり・表情・しぐさの辞典』を、判型を縮小し、ハンディな増補新装版として再び世に問うことになりました。巻末には、「身ぶり」と異文化理解」と題し、身ぶりに関する基礎的な事項をまとめた解説を増補しました。旧版は、身ぶり（ジェスチャー）の調査に基づいたユニークな辞典として、外国人留学生たちの日本文化理解や日本人学生たちの異文化理解に、また、たとえばロボット工学関係の研究室や、テレビ局の番組制作の資料として、多少とも役立ってきたのではないかと自負しています。

「日本人編」の身ぶりは、私たちにとっては自明のことと思えるかもしれませんが。しかし、海外に留学した日本人学生の多くが、留学先で日本の文化や風土、習慣などについて聞かれ、如何に自分が自国のことを知らないかということに気づかされるように、身ぶり手ぶりの意味や使い方に関しても意識して考える機会は決して多くはありません。私たち自身の文化の一端である身ぶり手ぶりについて、自ら調査し理解することが必要であるとの思いから、私はこの分野の研究調査を続けてきました。

身ぶり手ぶりの意味や使い方について、自身の経験のみに頼って日本人全体がそうであるかの如く説明するわけにはいかないと考えます。なぜならば、自分が生まれ育った地域以外ではそのような使い方はしないかもしれませんし、世代が異なると意味が通じないかもしれません。身ぶりには、同じ人間として共通に理解できることもある反面、「文化差」はもちろんのこと、「地域差」「年齢差」「男女差」「状況差」、そして「個人差」があるからです。本書は、「日本人編」も「アメリカ人編」も長年にわたる調査のデータを基に客観的に記述しています。これが本書の大きな特徴であるとともに、データ集としての価値がある所以です。

本書のもう一つの大きな特徴は、〈使われ方〉として、「使用頻度」「性別」「年齢」「親密度」「形式度」「品位」に関する数値的データを提示していることです。身ぶりについて、このような〈使われ方〉を明らかにしたデータとその分析がある類書は、他に例がありません。フォーマルな場面で使う身ぶりなのか、親しい友だちとインフォーマルな場面で使うもののかなど、留学生は日本人の身ぶりの使用状況についてかなり詳細な情報を得られるでしょう。また、アメリカに留学する日本人学生も、アメリカでは男性が使う身ぶりなのか、女性が使うことが多いのかなどの違いが理解できるはずです。データの読み取りができるようになると、一つ一つの身ぶりへの洞察が深まります。身ぶりの意味を知っているだけ

では、その理解のほんの入口に立ったにすぎないのです。

「アメリカ人編」は、「卒業 (The Graduate)」「アメリカン・グラフィティ (American Graffiti)」「ジョーイ (Something for Joey)」といった、懐かしの名画から身ぶりを取り上げ、該当場面の会話とともに載せてあります。実際に映画やTVドラマのDVDを見ながら一つ一つの身ぶりを確認していくのも、洋画ファンや英語学習者にとって楽しい作業となるでしょう。また、小・中学校の国際理解教育の授業で、「異文化の身ぶりを理解する」という観点から本書のデータを使っていただくことも可能です。

「日本人編」は、日本にいる留学生や企業で働く在日外国人にとって、日本人を理解する一助となるはずですが、日本語が流暢に話せたり理解できたとしても、本書にあげたような身ぶりを理解してはじめて真のコミュニケーションが取れるようになります。日本語教育の現場である日本語学校でも、参考書としてぜひ備えていただくことをお奨めします。

今回は、デズモンド・モリス 著／東山安子 訳『ボディートーク新装版 世界の身ぶり辞典』(三省堂)との同時出版となりました。この二冊は扱う地域が相補的な関係にあり、両方を利用することでより深く身ぶりを理解することができます。共通点は、どちらも調査データを基にした客観的な記述を心がけており、信頼性が高いことです。『ボディートーク』には、モリスの長年の人間観察者としての知見や動物行動学者としての視点が記述されていることも見逃せません。本書の巻末には、それぞれの辞典で相互に関連している身ぶりの名称や番号をまとめた「項目一覧および対照表」を付しました。両者を、読む辞書としてご利用頂くことにより、人間のコミュニケーションのおもしろさに気づき、身ぶりを通した異文化理解を深めることができるでしょう。いつも手元に置いて楽しんで頂ければ幸いです。

2016年3月9日

INVC 暮らしとアートの研究所

<http://nonverbal-invc.com>

代表 東山 安子